



大島産業グループ

〒811-4154 福岡県宗像市富地原1791-1
Tel.0940-33-1558

<http://www.ohshima-sangyou.com>

宗像市役所でお披露目された第2弾の世界遺産応援トラック



～特製ラッピングトラックで7月の宗像・沖ノ島の世界遺産登録を応援～ 時代の先を見据えた経営感覚で 「大島らしさ」を追求し具現化する

公共事業を中心とした建設事業と、長距離輸送を軸にした物流事業を二本柱に事業展開する大島産業グループ（福岡県宗像市、大島康朋CEO）。異なる事業分野でありながら、シナジー効果を引き出すことで、事業価値の向上に努めている。特に、時代変化への対応はスピード感を持って取り組んでおり、トラックや建設関連機器についても先進的な導入を進めている。また、世界遺産応援トラックの制作を通じて、地域振興の先導役も果たしている。

地元の「意地」を込めて 8資産で世界遺産登録を

ことし5月、日本が国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界文化遺産に推薦していた福岡県の『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群』（福岡県宗像市、福津市）について、ユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議（イコモス）が、登録が適当とユネスコに勧告したのは、構成する全8資産のうち4資産を除外するということの思わぬ判断だった。国や自治体は、7月の正式決定までに8資産全ての価値を理解してもらえようように働きかけを強めるとしているが、どのような結果になるか判然としにくい。

そんな中、大島産業グループでは、15年に引き続き第2弾となる宗像・沖ノ島と関連遺産群の世

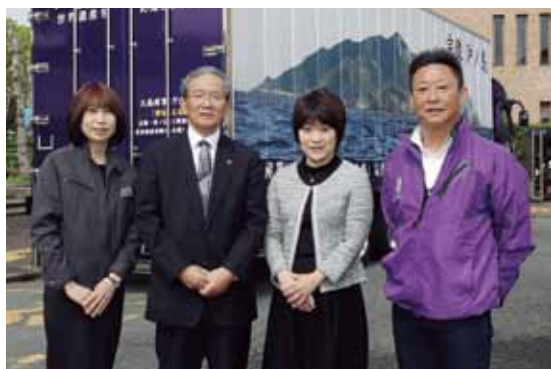
界遺産登録を支援する特製のラッピングトラックを完成させた。福岡県や宗像市、宗像大社などの了解を得て、地元貢献の一環として企画しているもので、20ト超の大型トラックのボデーには、登録が本命視されている沖ノ島と、その沖ノ島を望む大島にある宗像大社沖津宮遙拝所を両面に、後部には沖津宮、中津宮、辺津宮をモチーフに三つの鳥居を描かれた宗像・沖ノ島と関連遺産群の公式ロゴが配置された。

4月に宗像市役所でお披露目されたが、谷井博美宗像市長を始め市関係者、地元選出の宮内秀樹衆議院議員夫人のほか、福岡銀行幹部、九州ふそう幹部らが出席し、トラックの迫力に圧倒されながら登録への期待を込めた。

今回のイコモスの勧告によって、沖津宮遙拝所などは除外となる見通しで、公式ロゴも広く使われ



宗像大社沖津宮遷拝所も描かれた



大島社長、谷井市長、宮内衆議院議員夫人、大島CEO

なくなる可能性もあるが、福岡県・宗像市の意向としては8資産全ての登録にあるため、このトラックはそうした意思を受け継ぐ存在といえ、例え、沖ノ島と周辺岩礁のみが正式登録されたとしても、付加価値が高まるのは間違いない。ちなみに第1弾トラックは、宗像大社辺津宮と宗像の漁船群が描かれている。

大島康朋CEOは「第1弾のトラックを含めて2台のトラックが全国を走り回って宗像市のPRしている。ドライバーによれば、トラックを見た人からの問い合わせも多く、関心が高いようだ。世界遺産は当初の申請通りに登録してほしいと願っているが、このトラックが地元の「意地」を示せる存在になれば、制作した意義はあったと思う」と話し、逆に希少価値を高めた特製トラックで、地元を盛り上げる先導役としての役目を果たしたいとする。ちなみに、この2台のトラックには同社のエースドライバーのみが乗務できる。

三菱ふそうの新型車両 九州初1号車が納入へ

先導役となっているのは地域振

興だけではない。ことし5月、ヒルトン福岡シーホークで関係者向けに三菱ふそうトラック・バスの新型トラック「スーパーグレイト」がお披露目された。

このトラックは全車AMTで、大型輸送に求められる安全性、経済性、快適性、環境への配慮したというのが売り。特にアクティブ・ブレイキ・アシスト4は、停車車両に対しての衝突回避を可能にし、歩行者も検知して衝突被害軽減を図るといふ。三菱ふそうが「革新的なテクノロジーを搭載した新型スーパーグレイトが既成概念を覆し大型輸送の新たな常識を生み出します」と豪語する戦略車で、



三菱ふそうの新型トラックお披露目の様子

九州では最初に大島産業Gがこの新型トラックが納入されることが決まっている。

大島CEOは「順次20台ぐらいついで導入していく予定」としている。また、「全車AMTという選択には驚いたが、これからはドライバー不足も経営課題になってくる。女性や経験の浅い若いドライバーでも運転できるような車両に変わっていくのではないだろうか。これも時代の流れだ」と話している。

待望の関東圏進出で 特殊土木事業を拡充

一方、建設事業部も飛躍の時を迎えている。同社は昨年、福岡北九州高速道路公社発注の福岡市都市高速道路の土木維持補修業務の受注に初めて成功したが、同10月には初めて東日本高速道路の発注工事を受注し、待望の関東圏への進出を果たした。同工事は常磐自動車道吉川高架橋はく落対策工事で、高架橋の長寿命化として橋梁の補修を行う工事だ。「これから公共事業も減少していく中で、当社としては橋梁や道路の補修などの特殊土木分野に特化していく方針だ。補修分野では市場が



常磐自動車道吉川高架橋はく落対策工事の様子



見坂トンネル工事の貫通式



デジタル看板を前に説明する大島CEO

広がっており、関東圏でもしつかり地歩を固めたい」（大島CEO）と話している。

また、福岡市都市高速の維持管理は、24時間対応で、巡回パトロールから車線規制、応急措置まで初体験の業務となったが、「ここで蓄積した経験は大きい」として、今度は関東圏での高速道の土木維持補修業務の受注を目指している。

一方、本業の公共事業では福岡県発注の県道飯塚福岡線見坂工区トンネル工事（トンネル延長842m、幅員9・5m）を14年に清水建設・松本組とともにJVで受注し、工事を進めていたが、ことし5月で工事は完了した。

これに先立ち2月には関係者を集めてトンネルの貫通式が行われた。実際の供用開始は来春となるが、同社としては初めての大型トンネル工事で貴重な実績と経験を得ることになった。

九州初の路上工専用デジタル看板を導入

ICTを全面的に建設現場に導入し効率化を図る「i-construction」についても導入準備を進めている。i-constructionは国土交通省が推進している施策で、測量から設計、施工計画、検査までをICTを使って自動化するも

ので、熟練工の高齢化や人手不足が深刻化する建設業界を課題を解決するものとして注目されている。

大島産業Gでは、九州ではまだ導入実績がない国土交通省NETIS登録の路上工事現場用デジタルサイネージを今春、設置した。これは工事看板としてだけでなく広告媒体としても活用できる。また、災害などの非常時には避難場所の表示や緊急速報を流すことも可能となる。大島CEOは

「広告媒体として活用できるため、付近の飲食店の紹介もできれば、工事で協力していただいているお返しに

もなる。活用法は幅広い」と話し、新飯塚駅近くの国道201号立岩改築工事の現場で稼働している。

今年も若手社員を採用 将来は外国人採用も模索

建設事業部と物流事業部の共通した経営課題となるのが人材の確保だ。どちらも過酷な現場であるため、人が集まりにくくなっている。昨今、話題となったヤマト運輸の宅配サービスでも「仕事はあるけど人が足りずに現場回らない」という実態は、物流業界だけの問題ではなくなっているのだが、ここでも時代の先を読み、先手を打っている。

同社では昨年、八幡工業高校を卒業した18歳の男女2人を採用、物流事業部には21歳の女性ドライバーが入社した。若手社員



期待の若手社員3人

と女性社員という新風が吹き込まれた年だったが、ことしも八幡工業高校卒の18歳の女性を含む3人の新人社員が入社した。

今後も若手採用を積極的に進



今年も宮内秀樹衆議院議員が駆けつけた



総勢140人が集まった清掃活動。この規模は異例だ…

めていく方針だが、ドライバー確保に関して、大島CEOが目下、念頭にあるのが国際免許を持つ外国人労働者の活用だ。まだ法律や運用面など実現にはクリアすべき課題はあるというが、基本的には国際免許があれば、外国人が国内で車を運転することは可能だ。建設事業部でも外国人活用の道を探るためベトナムへの視察を行っている。業界の常識に風穴を開けてきた大島CEOの発想と行動力が注目される。

快晴の下「大紫会」で 国道3号線沿いを清掃

地域貢献活動では、先述の世界遺産トラックのように一過性のものではなく、継続性を重視した清掃活動が行われている。「道路を使って商売させてもらっているのだから、道路を清掃するのは当たり前なこと」（大島CEO）として、毎年恒例となった5月に第4回目となる大島産業G安全協力会「大紫会」が行う清掃活動が実施され、協力会社など約140人が集まった。同会は国土交通省とVSP（ボランティア・サポート・プログラム）協定を締

結しており、継続的に地域に貢献しているボランティア団体で、国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の所長からVSPについて説明が行われた。

今回は前回よりも3倍近くに清掃範囲を広げ、国道3号線沿い（徳重交差点から城山交差点）を黙々と清掃活動を行った。こうした清掃活動は珍しくないが、同会は毎回150人近くの人数が参加する大きな規模で行われており、地域でも話題の活動となっている。また、こちらも恒例となっている大島CEOの友人であり、地元選出の宮内秀樹衆議院議員も忙しい国会の合間をぬって駆けつけ、参加者を激励した。

「嗅覚が鋭いのではなく 臭覚が効いている」

大島CEOは幾つかの金言がある。代表的なのが、「仕事が先。カネは後。口は最後」。これに続くのが「嗅覚ではなく、臭覚を磨くこと」。大島CEOはある時「大島さんは仕事の嗅覚が優れている」と指摘されたが、それは違うと反論したという。「嗅覚というのは天性のもの。自分の場合は強

いて例えれば臭覚だ。いわば経験に基づき、導き出される答えを見つめる能力が身につけているということだろう。現場を経験し、たくさんの失敗をした人間でない、仕事から漂ってくる臭いを嗅ぎ分けることもできないはずだ」と解説。世の中には、事業を天性の勘を生かして成長させていく経営者もいるだろう。だが大島CEOは「現場のたたき上げ」。経験と実績があるからこそ、事業を成長させていくためのポイントが的確に見えるのだという。

時代変化のスピードが速い時代にあつて、「目標やビジョンは明示しない。明日何が起こるかかわからない激動の時代に、先のことは語れない。心の奥底に秘めたものはあるが、最も大事なものは、目の前の仕事を一つずつ完璧にこなしていくこと」というのも、決して先のことを見ていないわけではない。それは将来に向けた、さまざまな先進的な取り組みが証明している。昨年、創業50周年を迎え、次のステップに移行した大島産業G。今を大事にしながら「臭覚」を効かしてこの荒波を乗り切る「大島らしさ」を追求する経営から、今後も目が離せない。